



Cover Illustration  
Sgt. Jack M. Carrillo, USMC  
© WORLD PHOTO PRESS 2024  
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

004 第65回 **サイゴン物語 Saigon Memories**  
MACVがいたベトナム戦争「入口から出口まで」[14]

036 **I Love Beretta M92!** by Takeo Ishii

038 **ベトナムを遠く離れて——。**  
嗚呼、JAC Part 4、大仕事、AR-18! [後編] 文/小倉徹

040 **LIFEが語るベトナム戦争**  
20世紀アメリカ社会と兵士の顔 文/原克 (早稲田大学教授)

052 **ベトナムで戦った  
アメリカの同盟国軍** Part 2

The Equipments of the U.S. Force  
061 **[現用米軍装備カタログ]**  
番外編! NAVY SEALリエナクター装備特集 解説/松原隆

070 **サバゲ三等兵APS部 特別編**  
マルゼンワルサーPPK発売記念レポート!

074 **ウエスタンアームズ新製品レポート**  
Report by SHOTGUN MARCY  
●ベレッタM92FS フルオート・センチュリオン  
●ハードボーラー ターミネーター・モデル  
CBHW Ver.

079 **タナカワークス新製品レポート**  
Report by SHOTGUN MARCY  
●S&W M360J "SAKURA"  
海上保安庁モデルHW Ver.2  
●S&W M65 3インチ  
ステンレス・フィニッシュ Ver.3

082 **トイガンニュース**  
タナカワークス  
●S&W M29 クラシック6-1/2インチ HW Ver.3  
●モデルガン スモルト・リボルバー 6インチ  
HW Ver.3/スクエア・バット

084 **Militaria Roundup!**  
U.S.NAVYユニフォーム Part 3



090 **東京マルイ  
電動ガン+シリーズ第2弾  
パトリオット+**

094 **COMBAT RECOMMEND MOVIE**  
『コヴェナント/約束の救出』

DJちゅうの  
095 **GEARHEADS JUNCTION**  
5.5th MIL-CAM  
2023.11.25-27 Military Camp Event編

ニッポンのちからこぶ 写真・文/菊池雅之

100 **05JX** 令和5年度  
自衛隊統合演習 [前編]

104 **新製品情報 COMBAT mono**

COMBAT FRONT LINE

107 今月の中田焦点!  
HELIKON-TEX イギリス軍タイプ SASスモック

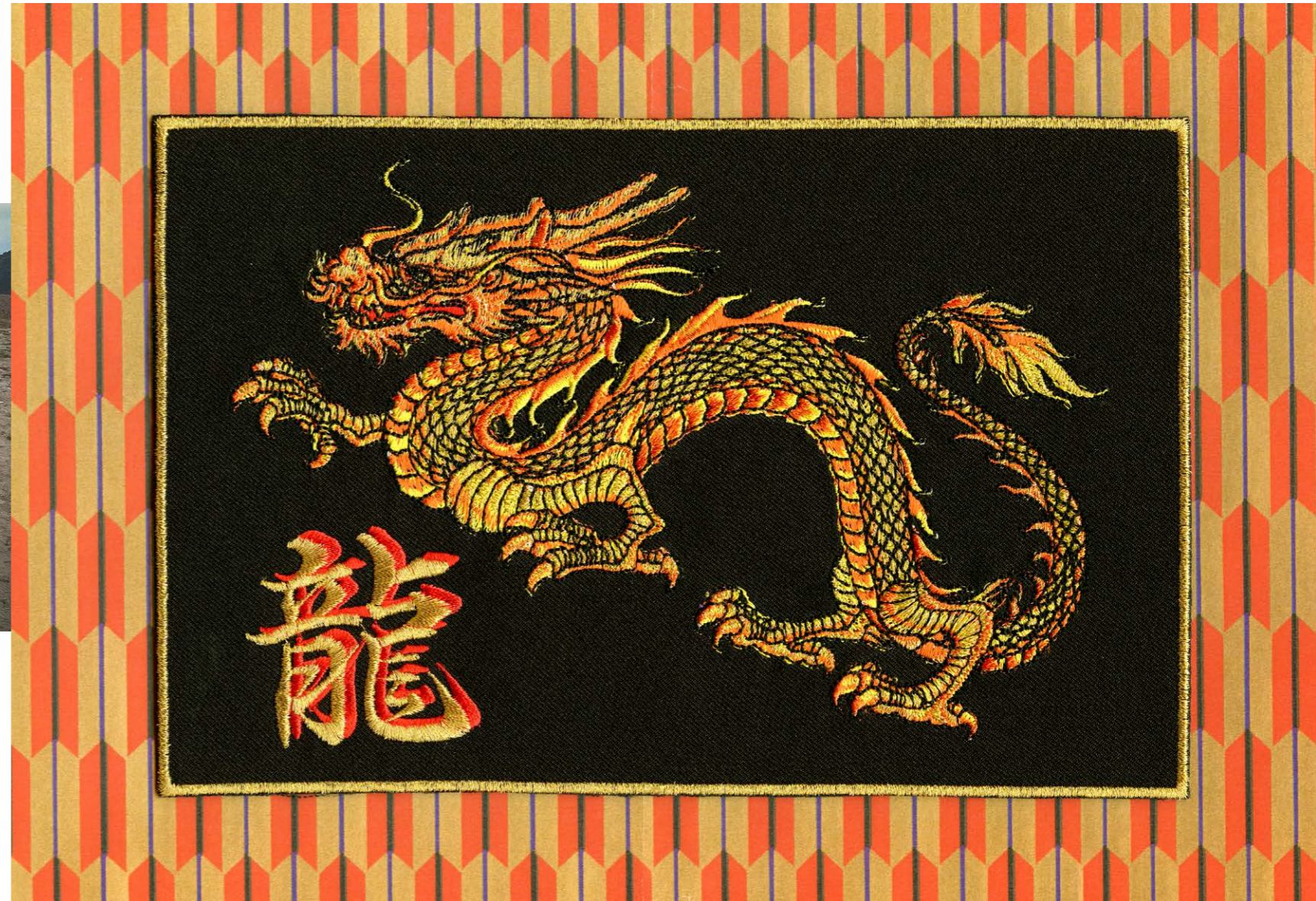
108 新作映画情報  
『ヴェスパ』 『サウンドオブサイレンス』  
『ザ・ガーディアン 守護者』

106 レアミリタリーテクノロジー

109 読者プレゼント & CIC

110 バックナンバー

111 次号予告&奥付



ミリタリースポッター

**This year is the Year of the Dragon in the Chinese zodiac.  
The dragon depicted here is crafted by the embroidery shop  
'Crazy Store' in Okinawa City.**

**During the Vietnam War era, jackets adorned with dragon motifs were favored by American soldiers, who purchased them as souvenirs and brought them back to their homeland. In that period, Okinawa City, formerly known as Koza, was a town near U.S. military bases, catering to American soldiers. Numerous embroidery shops thrived, providing various designs to the servicemen stationed at the U.S. military bases.**

本年は辰年、ドラゴンの年である。ここにある龍は、沖縄市にある刺しゅうの店「クレージーストア」が製作した。ベトナム戦争時代には、龍を刺しゅうしたジャケットが、戦争土産として米兵たちに好まれて、彼らはそれを祖国に持ち帰った。現在の沖縄市は当時コザと呼ばれており、米軍基地に所属する米兵相手に、多くの刺しゅうの店があった。

Embroidered by Crazy Store  
作品製作/刺しゅうの店 クレージーストア  
☎098-937-6916 <https://www.crazy-emb.com/>

# BERETTA M9

軍隊におけるピストルはしばしば「サイドアームズ」と呼ばれることから分かるようにライフルや機関銃ほどの存在感はない。しかし危急の際にもっとも頼りになるのはピストルを置いてほかになく、その仕様や性能がしばしば兵士の生死を分ける。1980年代半ばに数ある国産ピストルを押し退けて、アメリカ軍がイタリアのピストルを採用した真の意図とは何か。

Report by KEN NOZAWA

図版解説 / 鈴木健太郎

Photo / U.S. ARMY, U.S. NAVY, USMC, WPP Archive  
Illustration / M. Kelly



LEPL JAMES AGGLAY  
7 MAR 83  
AD DIWANLIJAN, IRA

# BERETTA M9

## ベレッタM1915

ベレッタM1915は、1915年にベレッタ社が初めて開発した半自動ピストルである。イタリア軍は1910年に半自動ピストルとして、自国生産のグリセンチM1910を制式採用していたが評判が芳しくなかったことと、第一次世界大戦の開戦によってグリセンチM1910は供給不足に陥ったため、ベレッタM1915が急遽開発されることとなった。そのスペックは下記のとおりだ。

- 全長：171mm
- 重量：850g



ニュージーランド陸軍の兵士たちに近接戦闘におけるM9ピストルの運用法を伝授するアメリカ海兵隊員。イラクやアフガニスタンで何度となく近接戦闘を経験したアメリカ軍では装弾数の多いM9が大活躍し、ピストルの有効性が改めて認識されるようになった。ただし屋内では敵にピストルを奪われる事例も頻繁したため、現在では構え方やホルスターの位置などに大幅な変更が加えられている。

- 口径：9mmグリセンチ弾
- 銃身長：94mm
- 装弾数：7+1発
- 作動方式：シングルアクション  
ストレイト・ブローバック
- 銃口初速：280m/s

「9mmグリセンチ弾」はグリセンチ・オートマチック・ピストル用に開発された実包で、外観・寸法は9mmルガー弾と同一となっている。ただし9mmルガー弾と比べて軽い弾丸と少ない装薬であり、はるかに低い腔圧だったことで銃口初速は低くなっている。同一寸法であることから9mmグリ

センチ弾を9mmルガー弾口径のピストルに装填しての射撃は可能だが、パワー不足から正常作動は適わない。逆に、9mmルガー弾を9mmグリセンチ弾口径のピストルで、つまりはベレッタM1915に装填しての射撃も可能だが、その場合、射手の安全は保障されず、銃器の破損・故障が発生するものと思われる。

ベレッタ社がM1915を開発した時期には、すでに9mmルガー弾はポピュラーな存在ではあったが、あえて9mmグリセンチ弾を採用したのはストレイト・ブローバック機構を採用したいがためと思われる。シンプルな機構での生産性とコストを優先したわけだ。もちろんグリセンチM1910との

るベレッタ・デザインが完成したことになる。M1923は1923年から生産が始まり、1930年代中頃まで製造が続けられ、総数約10,000挺が作られた。イタリア陸軍が1926年に採用したほか、同じく1926年にブルガリア陸軍が、そして1933年にはアルゼンチン警察が採用している。スペックは下記のとおりだ。

- 全長：164mm
- 重量：875g
- 口径：9mmグリセンチ弾
- 銃身長：98mm
- 装弾数：8+1発
- 作動方式：シングルアクション  
ストレイト・ブローバック
- 銃口初速：305m/s

## ベレッタM1934

1930年代初頭にM1915の直系と言える発展型のベレッタM1931とベレッタM1932を開発したが、両機種とも.32ACP弾を使用し、小型軽量で使いやすかった。ベレッタ社はそれを改良し、さらに部品数を減らし、強度を上げた新機種を開発するに至る。

その新モデルは.380ACP弾を採用しながらも小型でシンプルな作りによって故障の少ないことから1934年にイタリア軍にM1934として制式採用され、第二次世界大戦全般に渡りイタリア陸軍に使用されることとなった。特徴のひとつとしてグリップの木製パーツを廃し、金属製となっている。また派生型として同形ながら.32ACP弾を使用するM1935も開発され、両モデルともに商業的成功を取っているが、とくにM1934は100万挺以上の生産を記録した大ヒット商品であった。ベレッタM1934のスペックは下記の通りだ。

- 全長：149mm
- 重量：660g
- 口径：.380ACP弾
- 銃身長：87mm
- 装弾数：7+1発
- 作動方式：シングルアクション  
ストレイト・ブローバック
- 銃口初速：240m/s

## ベレッタM1951

ベレッタ社が、イタリア軍の制式拳銃だったM1934に替わる軍用ピストルとして、第二次大戦直後に開発した半自動ピストルがM1951である。このM1951は後に92シリーズの元型になったとも言われるモデルであり、ハンマー露出式のシングルアクション撃発機構と、ドイツのワルサー P38を模した、降下式のロッキングブロックが組み込まれたショートリコイル方式を採用している。ベレッタ社初のブリーチ閉鎖式の自動拳銃であり、それは明らかに92シリーズを連想させる形状である。それというもM1951は、M1923やM1934同様に銃身が剥き出しのデザインだからだ。ベレッタ社が降下式のロッキングブロック機構をM1951に取り入れたのは、M1911A1に代表され、ほかの多くのピストルで採用されているティルト・バレル機構にすると、銃身が剥き出しのベレッタ・デザインを残せないため……という説もある。もち

ろん、ワルサーP38の同機構が集弾性能を高める上で役立つという実用的な理由もあると思う。

ごく初期のモデルはフレームが軽合金製だったが、9mmルガー弾の使用では耐久性に不安が残ったことから、1955年以降のモデルはスチールフレームに変更されている。本格的な生産が行なわれたのもスチールフレームモデルからである。イタリア軍に採用されたほか、エジプトやイラクでもライセンス生産された。M1951のスペックは下記のとおりだ。

- 全長：204mm
- 重量：935g
- 口径：9mmルガー弾
- 銃身長：116mm
- 装弾数：8+1発
- 作動方式：シングルアクション  
ショートリコイル
- 銃口初速：349m/s

さて。M1951から、どのような流れでベレッタ92へと移行したかという点、そこには切実な時代背景が絡んでくる。

1970年代に入るとイタリアでは、政治テロとしての誘拐や、富裕層を狙っての営利目的での誘拐が多発するようになると身辺警護の需要が高まり、合わせて犯罪者への対抗策としての銃器の需要も高まることとなった。その際、攻撃力の高さや扱いやすさ、そして機能性や操作性も求められたことから、M1951では対応不十分と判断したベレッタ社では、時代に合ったピストルの開発を目指すこととなった。「時代に合ったピストル」とは、装弾数が多く、ダブルアクションでの射撃可能なピストルである。

現代の感覚では多弾数もダブルアクションも常識だが、1970年代初めの時代にそれは珍しい仕様で、1971年に発売のS&W社製M59がほぼ唯一の存在であった。

ベレッタ社はM1951をベースに、多弾数かつダブルアクション仕様のピストルを完成させたが、それがベレッタ92（ステップスライド）だ。

ここでひとつ解説しておきたいのは「92」という呼称に関してである。よく目にする表記はM92



陸軍が指定するM9用ホルスター2種。左は通常型、右は隠し持つ際に用いられるタイプである。近接戦闘における技能や戦術が飛躍的な進歩を遂げた現在では、ホルスターもシチュエーションによって使い分けるようになっており、どのタイプも安全性と機能性を高いレベルで両立させている。

M9ピストルのセーフティの解除法を示したイラスト。解除のタイミングは標的に向けたとき、ホルスターから抜いて構えるまでの間、ホルスターから抜く直前の3つに大別され、どの場合も腕が身体から離れる前に解除を終えていなければならない。セーフティレバーの操作は標的に向けてから解除する場合はどちらの親指を用いても良いが、それ以外は利き腕の親指で解除する。



ホルスターからM9A1ピストルを抜き出す海兵隊員。M9A1は海兵隊の要望によりフレームにレイルシステムが備えられたバリエーションモデルで、プレてはいるがフレームの下部がレイルの増設により直線的なシルエットとなっているのが分かる。現在M9およびM9A1には前ページとここで写っている合成樹脂製のホルスターが用いられるのが一般的で、M9には当初ビアンキ社が開発したナイロン製M12が用意されていた。

# LIFEが語る ベトナム戦争

## 20世紀アメリカ社会と兵士の顔

文／原克(早稲田大学教授) 構成／編集部

# LONE PROFESSIONALS

## 第5回

# タフガイの孤独

## 軍事顧問団奮闘記

テオドール・W・アドルノ『ミニア・モラリア』によれば、偶像崇拜は思考停止に他ならない。「表示法が表示されたものを圧倒する」からだ。記号はその出来映えが見事であればあるほど、大衆のまなざしは記号の表層に滞留し、背後に潜む本質、真の意味には向かわない。戦場のタフガイ。戦争ヒーロー。それは戦場の記号であり、戦争報道における第二の偶像崇拜である。孤独なエース・パイロット、ゲリラ戦専門の一匹狼、軍事顧問団派遣時代のヒーローたち。その物語は本物で、その英雄列伝は圧倒的だ。本物であるがゆえにその物語は神話となり、偶像崇拜を呼ぶ。結果、彼らの悲劇を生んだ真の原因・ベトナム戦争の本質に、大衆の思考のまなざしは届かない。圧倒的な記号の前に思考は停止してしまうのだ。戦争ヒーロー。個人神話という表層的部分が、ベトナム戦争の本質の全体を隠蔽するのである。



派手に打ちまくるアメリカ軍兵士が描かれたベトナム戦争時のパロディイラスト。南ベトナムに対し軍事顧問団の派遣という限定的な援助の姿勢を取っていたアメリカはジョンソン政権の誕生により本格介入へと方針を転換していく。



フライング・タイガー部隊のP-40戦闘機。P-40は機動性に難があったものの部隊の主力として日本軍との戦いに投じられた。Photo/U.S.Army

## フライング・タイガーの撃墜王

『ライフ』1954年5月24日号は伝説のエースを哀悼している。

「地震野郎の終焉」<sup>(1)</sup>と題された記事だ。副題にはこうある、「インドシナでフランス軍を助けてきた一人の驚異的なアメリカ人パイロットの死」<sup>(1)</sup>。

インドシナ半島からのフランス軍撤退に、世界は驚いた。

しかし、上海からシンガポールまで、『地震野郎マッグーン』として知られた、偉大で伝説的な人物の友人たちにとっては、「ディエン・ビエン・フー陥落のニュースは、地震野郎が死んだという——信じがたいが真実である——悲しいニュースに比べれば、何ほどのことはないように見える」<sup>(1)</sup>。

かくも狂信的な尊敬を集める人物とは、誰なのか？

本名はジェームス・B・マクガヴァン大尉。アル・キャップ作の人気漫画の登場人物にならって、愛称「地震野郎マッグーン」と呼ばれていたパイロットだ。

ニュージャージー州エリザベス出身、クレア・リー・シェンノート將軍率い

る第14空軍の戦闘機乗りとして、中国に渡った。

第二次世界大戦時、「日本軍機を4機確認撃墜・5機推定撃墜」<sup>(1)</sup>している。伝説の「フライング・タイガー」部隊のエースだ。

その後も中国に留まり、シェンノート民間輸送機CAT路線で飛びつづける。そして、民間輸送会社の一員として、インドシナ戦争にも加わった。

CATパイロット24名の内の一人で、ディエン・ビエン・フーへの物資補給のほとんどすべてで出撃した。

「俸給(月給3,000ドル)は良く、友人と軽口をたたき合っていた。『もし戦争に呼ばれたら狙われるだろうナ』」<sup>(1)</sup>。

そして、実際にそうってしまった。フランス軍敗北前夜。「文字通り最後の戦闘が終結する前日」、彼の愛機は二度被弾し、丘の中腹に墜落したのだ。

斜面に激突する直前、マッグーンは無線に叫んだ。「これで最期らしい、息子よ」<sup>(1)</sup>。

だが、僚機から同僚スティーヴ・キューザックが溪谷を見下ろすと、マクガヴァンが無線通話してきた。「スティーヴ、峰が一番低いのはどっちだ?」<sup>(1)</sup>。



上3枚／フライング・タイガー部隊のパイロットを捉えた写真。彼らは太平洋戦争が始まる以前から義勇兵として中国に渡り日本軍を相手に激戦を繰り広げた。フライング・タイガー部隊はAMERICAN VOLUNTEER GROUP (AVG)の制式名称を持ち、パイロットは一時的にアメリカ軍の籍を抜けて危険な任務に就く見返りとして一時金や元の階級での軍への復帰が約束されるとともに役職に応じて600~750ドルの月給、さらに一機撃墜ごとに500ドルの報奨金を受け取っていたのだが、アメリカが日本に宣戦布告したことを受けて1942年にAVGはアメリカ陸軍航空隊の一部となった。フライング・タイガーという愛称は中国軍が彼らを「飛虎」と呼んだことに因み、ウォルト・ディズニー・スタジオがデザインしたコミカルな部隊マスコットは現在でもアメリカ第14空軍で用いられている。Photo/U.S.Army 下／インドシナ戦争で物資輸送を行うCAT所属のC-46輸送機。CATは中国の国共内戦、朝鮮戦争、インドシナ戦争などで物資輸送の傍ら極秘作戦にも従事していた。Photo/U.S.Air Force

<sup>(1)</sup> "The End for Earthquake" "In Indochina a prodigious American pilot dies helping the French" in: LIFE, 1954, May 24, p.32f.

# ベトナムで戦った Part 2 アメリカの同盟国軍

アメリカの呼びかけで作られた自由世界軍、FWMFの活動を陸軍を中心に紹介するシリーズ、第2回はFWMFの一大勢力となった韓国軍です。  
文／鈴木健太郎 写真／U.S. ARMY, USMC, NARA, WPPアーカイブ



## REPUBLIC OF KOREA

韓国は1965年3月に工兵隊、医療部隊、憲兵隊、その他支援要員で編成された非戦闘部隊、通称Dove Unit(鳩部隊)を南ベトナムへ派遣したのを皮切りに同年9月から11月にかけて陸軍首都師団“猛虎”の2個連隊と海兵隊第2旅団“青龍”、翌66年4月には第9歩兵師団“白馬”がこの地に到着して本格的な活動を始めた。韓国軍は1973年に南ベトナムから撤退するが、FWMFの中で南ベトナム軍とアメリカ軍に次ぐ兵力を誇り、1966年は4万4897人、1968年は南ベトナムに駐留する外国の軍隊のおよそ9%にあたる5万人、1972年の終わりにはアメリカがベトナム化政策により兵力を2万4200人に減らす中で3万7438人もの韓国軍兵士が南ベトナムにいた。ベトナムで大きな存在感を放った韓国軍では戦果を挙げるために軍規がしばしば無視されており、戦地で行動を共にしたFWMFの兵士から頼りになるという声の一部で聞かれた一方、手当たり次第に武力を行使してはならないと南ベトナム軍やアメリカ軍から苦言を呈されることも少なくなかった。



ベトナムでの活動3周年記念式典で整列した猛虎師団の歩兵部隊とカラーガード。ベトナムで活動した韓国軍部隊の給料はアメリカから支払われており、部隊の派遣は韓国の経済成長の一助となっていた。

猛虎師団の兵士が敵のブービートラップに関する講習を受けているところ。教官の一人は興味深いことにタイガーストライプ迷彩服を着用している。

火力支援基地における猛虎師団の迫撃砲チーム。迫撃砲とその周囲がジグザグに掘られた塹壕で繋がられているのに注意。

ブービートラップの取り扱いを実演する猛虎師団の兵士。少々見づらいが左肩には虎をモチーフとした部隊章を付けている。

(下) 猛虎師団の看護師たち。カラーガードを捉えた上の写真と同じ式典で撮影された一枚である。(右) M1919機関銃の射撃準備を整える猛虎師団の兵士。掩蔽壕があるにも関わらず身体が大きく乗り出しており、機関銃の三脚や予備弾薬が露出するなどかなり不用心な態勢になってしまっている。



(上) クイニョンにあった猛虎師団のPX(売店)。看板には大きく部隊章が描かれている。(右) M79グレネードランチャーを装備した猛虎師団の兵士。ヘルメットバンドに付けられているのは階級章で、このような例はほかの兵士にも多く見られる。(下) 高原地帯をパトロールする猛虎師団の兵士たち。韓国軍はベトナムに到着した当初はM1ガーランドなど第二次大戦時の武器を装備していたのだが、戦争が進むとアメリカ軍からM16やM79といった新型が供与されるようになった。



(下左) ベトナム人にテコンドーの指導を行なう猛虎師団の兵士。ベトナムでは空手や柔道など日本の武道が各国の兵士に盛んに取り入れられており、空手から派生したテコンドーを学ぶ者もいた。(下右) PXで立ち読みする猛虎師団の兵士たち。所狭しと並べられたアメリカの書籍の中には表紙にJUDOと書かれたものまである。





# THE EQUIPMENTS OF THE U.S. FORCE

第199回 [現用米軍装備カタログ] **番外編!**

**NAVY SEAL**

**リエナクター装備特集**

part 4

●解説/松原 隆 ●撮影/山崎 学 ●協力ショップ/LAZY CAT、トイソルジャー、TRI'S(旧特工工房)  
●協力/木島秀邦 ●装備協力/次田和司、甲斐教郎(チーム・アルティメット) ●参照/Wikipedia

## リエナクトとは——?

日本の主なリエナクトといえ  
 リエナクト (reenact) とは、Re-enact と言う造語であり、歴史の再現 (または再演) を示す。ヒストリカル・リエナクトメント (Historical reenactment)、リエナクトメント (Reenactment) とも呼ばれる (ウイキペディア参照)。  
 昭和時代、ド田舎のコレクターの私の周辺にはこの呼び名はなかったが、当時の日本人によるベトナム戦争装備再現は世界レベルに到達していたようだ。これをベースに現在のコレクターはネットや専門店の情報を駆使して仲間を集い、エアソフトガンを用いたゲームと歴史再現を組み合わせたイベントも多く開かれている。

またリエナクトの世界的課題のひとつに、人権や人種差別の問題がある。どうしても避けられない。だが、日本人は人種問題に対して非常に憂慮するお国柄なので、現在紛争中で対立した国の装備で大会を行なうなどのような蛮行をしなければ、今後も趣味の仲間の輪は拡大し、新たな楽しみ方も広がっていくように思う。



VIVA! 精密射撃 #92  
**サバゲ三等兵 特別編**  
**APS部**

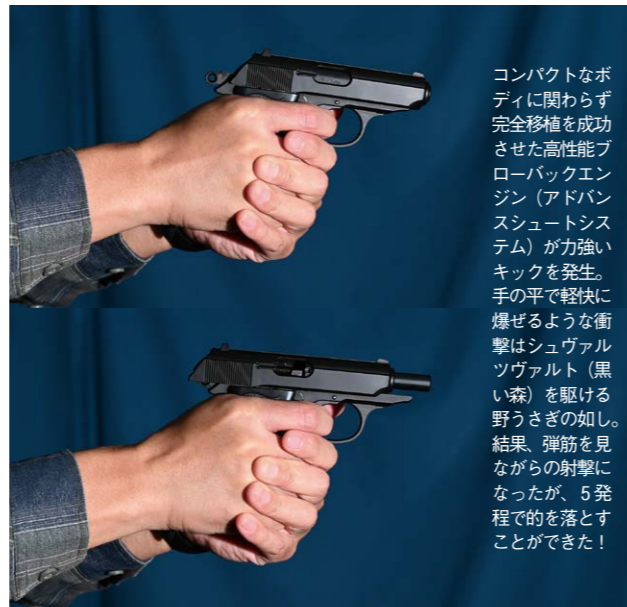
# マルゼン ワルサーPPK ブローバック ブラック発売記念! セーフハウスで性能評価!?!の巻

写真/織本知之 文/狩野健一郎  
 商品問い合わせ先/マルゼン ☎03-3623-2682 (受付時間/10:00~17:00 ※土曜、日曜、祝祭日、マルゼン休業日を除く)、<https://maruzen-aps.com/militarypolice>  
 撮影協力/赤羽フロンティア <https://frontier1.shop>



## 世界一有名なスパイの愛銃 PPKが、つっ、遂に!?! マルゼンさんから リリースされるってよ!

初代ショーン・コネリーから6代ダニエル・クレイグに至るまで、歴代のジェームズ・ボンドがスーツの下に忍ばせて命を託してきた、小さくても頼れる名銃ワルサー PPKが遂にマルゼンから発売されるとの情報を、シギントを駆使して得た(実際はマルゼンさんからご連絡いただきました)我らサバ三APS部臨時諜報部は、お得意の靴の踵を擦り減らす泥臭いヒューミントでもって(アナログおじさんの集団故に)試作機を極秘入手することに成功(実際はマルゼンさんからお借りしました)。東京は北区某所のセーフハウスの地下深くにある秘密の射撃場(実際はいつもお世話になっている赤羽フロンティアさん3Fシューティングレンジ)にて、早速性能評価を行なった。



コンパクトなボディに関わらず完全移植を成功させた高性能ブローバックエンジン(アドバンスシュートシステム)が力強いキックを発生。手の平で軽快に爆ぜるような衝撃はシュヴァルツヴァルト(黒い森)を駆ける野うさぎの如し。結果、弾筋を見ながらの射撃になったが、5発程で的を落とすことができた!



給弾口のリップが広いマガジンはBB弾を入れやすい。



APSカップのプレート競技で評価を行なったのは、「0029(ダブルお肉)」のコードネームを持つチバ隊長。初弾こそ普段使うAPS-3とのサイトやトリガーフィードリングの違いに戸惑ったものの、次弾からあっさり修正。次々と的を倒した。ちなみに最員のボンドガールには「言葉責めしてほしい」との理由でクラブ大佐(ロッチ・レーニャ「ロシアより愛をこめて」63)を挙げていたが、残念、ボンドガールじゃねえから!

- ワルサーPPK ブローバック ブラック
- 全長:約158mm
- 重量:約370g
- 相談数:18+1 (※+1はチャンバー内)
- 備考:ドイツ・ワルサー社 正式承認モデル
- 価格:14,080円
- 1月下旬発売



モデルとなった実銃のPPKは1931年に誕生した。PPKは“Polizei Pistole Kriminal”の略称である。拙い訳で申し訳ないが「刑事のための警察用拳銃」といった意味で、私服で犯罪捜査に当たる刑事が携帯しやすいようにPP (Polizei Pistole) を小型化したものだ。つまり隠匿性の高い拳銃……そう、いかにもスパイ向けの拳銃なのだ。(知人のアドバイスもあり)そこに目をつけた英国人作家のイアン・フレミングが自著の人気シリーズの主人公のスパイに持たせ(『ドクター・ノオ』57)、後年同シリーズが映画化されたことで、“007 ジェームズ・ボンドの愛銃”として広く認知され、不動の人気を得た。そんな“拳銃界の映画スター”とも呼べるPPKは、誕生から90年を経た現実の世界で今も、基本設計はそのままだと製造され、ワルサー社が誇る現役の歴史的な銃として光を放ち続けている。



ホールドオープン状態のPPK。スライドリリースの無いPPKの場合、解除するには、給弾済みのマガジンに差し替えるかマガジンを抜くしてから、スライドを後ろに引いて離せばよい。

精巧に再現されたリアとフロントサイトを繋ぐ波型のライン。PPKが古き良きドイツの“工芸品”と呼ばれる由縁の一つ。だが本来は、サイティングの際の視界の眩しさを軽減する実用的な意匠なのだ。



実銃同様のマニュアルセフティとデコッキング機能も再現。ハンマーが通常位置の状態ではセフティが操作すればセフティがかかり、ハンマーをコッキングした状態であればデコッキングできる。

PPK/Sは左右のグリップを2本のグリップスクリューでそれぞれ固定するが、PPKは実銃同様に長い1本を貫通させて、新規金型で作製したこだわりのグリップを固定している。



“Licensed Trademark of Carl Walther”の文字はワルサー社の正式ライセンス商品である証。マルゼンの「1950年代から60年代にドイツで作られた7.65mmのPPK」を参考にしたという言葉通り、40年代以降の生産品であることを表す、“鷲にN”のニトロ・マーク(無煙火薬使用合格印)が各所に見られる。

実銃に近いフィールドストリップ(通常分解)が楽しめるのも、いじって楽しいマニアにはうれしい。



WESTERN ARMS

# BERETTA M92FS FULL AUTO CENTURION *and* HARDBALLER TERMINATOR MODEL CBHW Ver.

実銃感と迫力を追求するふたつのマグナブローバック・モデル!

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY  
☎ウエスタン アームズ ☎03-3407-5922  
<http://www.wa-gunnet.co.jp>



074 ※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様が異なる場合があります。



TOYGUN  
REPORT

TANAKA  
WORKS

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY  
@タナカ・ワークス  
<https://www.tanaka-works.com>

# S&W M360J“SAKURA” 海上保安庁モデル HW Ver.2 *and* S&W M65 3inch Stainless Finish Ver.3

ガンフリーク注目のS&W近代型ダブルアクション・リボルバーを  
モデルアップした2挺のモデルガン!





# Militaria Roundup!

## U.S. NAVY ユニフォーム Part 3 U.S. ネイビー・ワーキング・ユニフォーム

現在はカモフラージュ化が当たり前となった各国軍の戦闘服兼作業服。それはアメリカ海軍も例外ではなく、デジタル・パターンのカモフラージュ・ユニフォームを作業服として使用している。今回の海軍ユニフォームPART3では現行の海軍作業服NWUを紹介しよう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格 撮影協力/サムズミリタリヤ屋 <https://www.sams-militariya.com>, MASH/06-6567-3312 <http://www.mash-japan.co.jp>

### アメリカ海軍の迷彩作業服 NWU

21世紀初頭のアメリカ海軍作業服、ワーキング・ユニフォームには本シリーズで紹介したダンガリーズやユーティリティ・ユニフォーム、そしてカバーオール等のバリエーションが存在した。海軍はこれらユニフォームの本一化を検討し、新型作業服の研究開発に着手。試作された作業服はブルーとグレーを基調にしたカモフラージュ・ユニフォームで、従来の海軍作業服のイメージを一新するものだった。カモフラージュは陸軍と海兵隊も使用したウッドランド・パターンのモノトーン版とデジタル・パターンの2種類で、色はブルーとグレーが基調。それぞれデザイン異なるものが2タイプずつ作られた。

試作NWUは2005年から翌年にかけて着用テストが行なわれ、被験者による評価や指摘を受けて08年に制式化された。新型作業服として採用されたNWUは作業服としてデザインされたもので、戦闘向けではない。ただし、海軍建設部隊シービーズや特殊部隊SEALSが砂漠地域や戦場で活動する場合は戦闘服と見なされる。だがブルーとグレーのカモフラージュは戦闘向きではなく、10年には砂漠および乾燥地帯を想定したデザート・パターンと、温暖地域向けのウッドランド・パターンを採用。これによりブルー&グレーのバージョンがTYPE I、砂漠向けがTYPE II、温暖地域向けがTYPE IIIとして区分された。

こうして採用されたNWUだが、TYPE Iは難燃性に問題があった。そこで海軍は2016年8月にTYPE Iを廃止してTYPE IIIに切替えることを決定。TYPE Iは19年10月1日付で着用が中止されている。現在アメリカ海軍が使用しているNWUはTEPE IIとTEPE IIIの2種類だが、海軍は現在も艦上と陸上の双方で着用可能な作業服の研究開発を続けている。

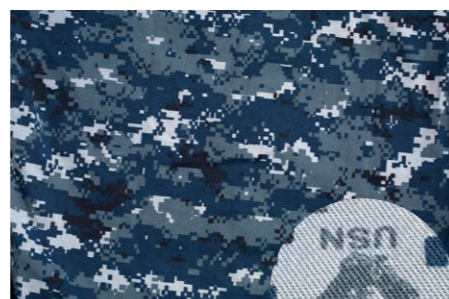
### カモフラージュのバリエーション

NWUが開発された当時、海軍としてはとくにユニフォーム・ユニフォームの必要性を感じてはならず、作業服のカモフラージュ化は意図したものではなかった。NWUのカモフラージュはデジタル・パターンでTYPE IからTYPE IIIまでの3種類が存在。TYPE Iはブルーとグレーを基調としたもので、これは海軍伝統の色を継承したもので、海軍はペンキ等の汚れや染み、小さな破れの補修が目立たないので、被服のコスト削減効果もあると説明している。

2010年に採用されたTYPE IIとIIIは海兵隊のMARPAT (マルチ・パターン。2001年採用) に似たパターンだが、色調がやや暗めで、パターンがMARPATは水平方向に流れるのに対し、TYPE IIとIIIは垂直方向となっている点が異なる。TYPE IIは砂漠地帯向けのデザート・パターンで、TYPE IIIはそれ以外の地域向けのウッドランド・パターンだが、海兵隊はこれらのカモフラージュ・パターンの採用に難色を示した。このため、TYPE IIは基本的に中東のSEAL部隊やシービーズ (建設部隊) 向けに限定。またTYPE IIIは16年末まで着用が陸上勤務部隊に限定されたが、翌年10月から海軍の新兵への支給を開始。19年10月には制式の作業服となり、現在に至っている。



2008年にアメリカ海軍は従来のユーティリティ・ユニフォーム (ダンガリーズ) に代わって、デジタル・パターンの作業服NWUを採用。海軍作業服のイメージを一変させた。NWUにはカモフラージュ・パターンの異なる3種類 (TYPE I~III) が存在しており、写真はパターンがブルーとグレーを基調としたTYPE I。(Photo : U.S. NAVY)



**TYPE I**  
TYPE Iのパターンは色にブルーとグレーを使用しているが、これは迷彩効果を狙ったものではなく、ペンキ等の汚れを目立たなくするのが目的。パターンには“ACE”と呼ばれる海軍のロゴ (円内写真) が一緒にプリントされている。



写真はノース・カロライナ州キャンプ・リッジューン海兵隊基地での訓練風景で、左側の兵士が海軍所属で、NWU TYPE IIIを着用。中央の負傷兵役と右側の兵士が海兵隊員でMARPATのデザート・パターンを着用している。(Photo : U.S. Navy)



**TYPE II**  
TYPE IIは砂漠および乾燥地帯向けにサンドカラーを基調とした色調で、海軍特殊部隊SEALSが特殊作戦で使用することを意図したものとされる。このため海軍におけるTYPE IIの着用はきわめて限定されている。(Photo : U.S. NAVY)



**TYPE III**  
TYPE IIIは温帯地方での着用を想定したもので、グリーンを基調としたパターン。2016年まで着用は陸上に限定されたが、現在では艦上でも着用されるようになっている。19年にTYPE Iと完全に切り替わった。(Photo : U.S. NAVY)

### NWU ジャケット BLOUSE, NAVY WORKING UNIFORM

NWUはデジタル・パターンのカモフラージュ・ユニフォームで、①ブラウス、②トラウザーズ、③キャップ、④アンダーシャツ、⑤ブラック・レザー・ブーツから構成される。トラウザーズはブーツ上部で膨らませて着用するように規定されており、ブラウジング・ストラップ (一種のゴムバンド) と呼ばれるアクセサリを使用する。①の“ブラウス”という名称は婦人服のようだが、ミリタリー・ユニフォームでは制服や上着を意味する呼称。ただし海軍服装規定では“シャツ”の名称で記述されており、本稿では日本における一般的呼称の“ジャケット”で統一した。



#### TYPE I

NWUのTYPE Iは2009年に導入された海軍の新型作業服で、デジタル・パターンのカモフラージュ生地を使用。生地の色から“ブルーベリー”とも呼ばれた。艦上と陸上の双方で着用とされたが難燃性に問題があり、港に停泊中を除き艦上での着用は禁止。陸上での着用に限定されている。このため19年に廃止とされた。写真は3等兵曹のNWUで、左胸に水上戦闘徽章が付いている。(撮影協力: MASH/00-01-4711 US NAVY NAWデジタル・カモ・ジャケット/フルパッチ/価格1万780円)

#### 試作タイプ (ウッドランド・パターン)

ウッドランド・パターンの試作は細部のデザインが異なるタイプBとタイプCの2種類が作られ、それぞれ各部のデザインが異なる。タイプBは丸襟で両袖にタクティカル・ポケットが付き、帽子は海兵隊と同型の8ポイント・カバー。タイプCは襟が角形で、タクティカル・ポケットの代わりにカーゴ・ポケットがジャケットの両裾に付く。また帽子は陸軍のフィールド・キャップに似たラウンド・トップ・カバーとなっていた。(Photo : U.S. Navy)



タイプB



タイプC

#### 試作タイプ (デジタル・パターン)

デジタル・パターンの試作2タイプ比較写真。デジタル版はタイプA (左) とタイプDの2種類で、両者の違いはウッドランド版と同様だが、襟は両タイプともに角形 (ただしデザインは異なる)。最終的に海軍が採用したのはデジタル版だが、制式NWUのデザインは両タイプの折衷となった。(Photo : U.S. Navy)



ユーティリティ・キャップ (カバー) はアメリカ海兵隊が使用している帽子と同様のデザインで、クラウン部が8点 (8ポイント) となっているのが特徴。帽子正面の中央には下士官および将校の階級章を付けた。キャップはまっすぐに被り、耳にまたがたがせず、バイザーは目線と一致させ、地面と平行にする。(Photo : U.S. Navy)

#### サイズ・ラベル

襟内側に縫い付けられたサイズ表示ラベル。アメリカ軍ユニフォームのサイズ区分はXSからXLまで計9種類が存在する。



NWUジャケットは裏地が付かない作りで、下には気候に応じてアンダーシャツやモックネック・セーターを着用する。TEPE Iの使用素材はナイロン50%、コットン50%の混紡。



# 電動ガン+シリーズ第2弾 PATRIOT+

Photo & Text by Takeo Ishii  
東京マルイ ☎03-3605-1113  
www.tokyo-marui.co.jp  
撮影協力 / BATON Range  
https://www.batonrange.com

PLUSシステム(=FET回路)搭載による先進機能を  
ARピストルの極小ボディに集約!



- マイクロプロサイト ブラック 7,480円
- マイクロプロサイト用銃口/ハイマウント 2,728円
- ツインドラムマガジン 9,680円
- タクティカルスリングセット 2,750円
- AKXストック一式(※マルイアフターパーツ部で単品購入となります)



- PATRIOT+**
- 全長: 465mm
  - 重量: 2,207g (空マガジン、ニッケル水素バッテリー含む)
  - インナーバレル長: 215mm
  - 動力源: MS・Li-Poバッテリー (7.4V 1,500mAh 35C) スタンダード・タイプ or 8.4Vニッケル水素1300mAhミニSバッテリー
  - 装弾数: 68発 ●可変HOP-UP搭載
  - 価格43,780円、1月25日発売予定



左右どちらからでも操作可能なアンビデクストラウス・コッキング・レバー。いっぱいまで引くとエジェクション・ポートが開き、HOP調整ダイヤルにアクセスできる。



## ダウンサイジングARの代名詞「パトリオット」

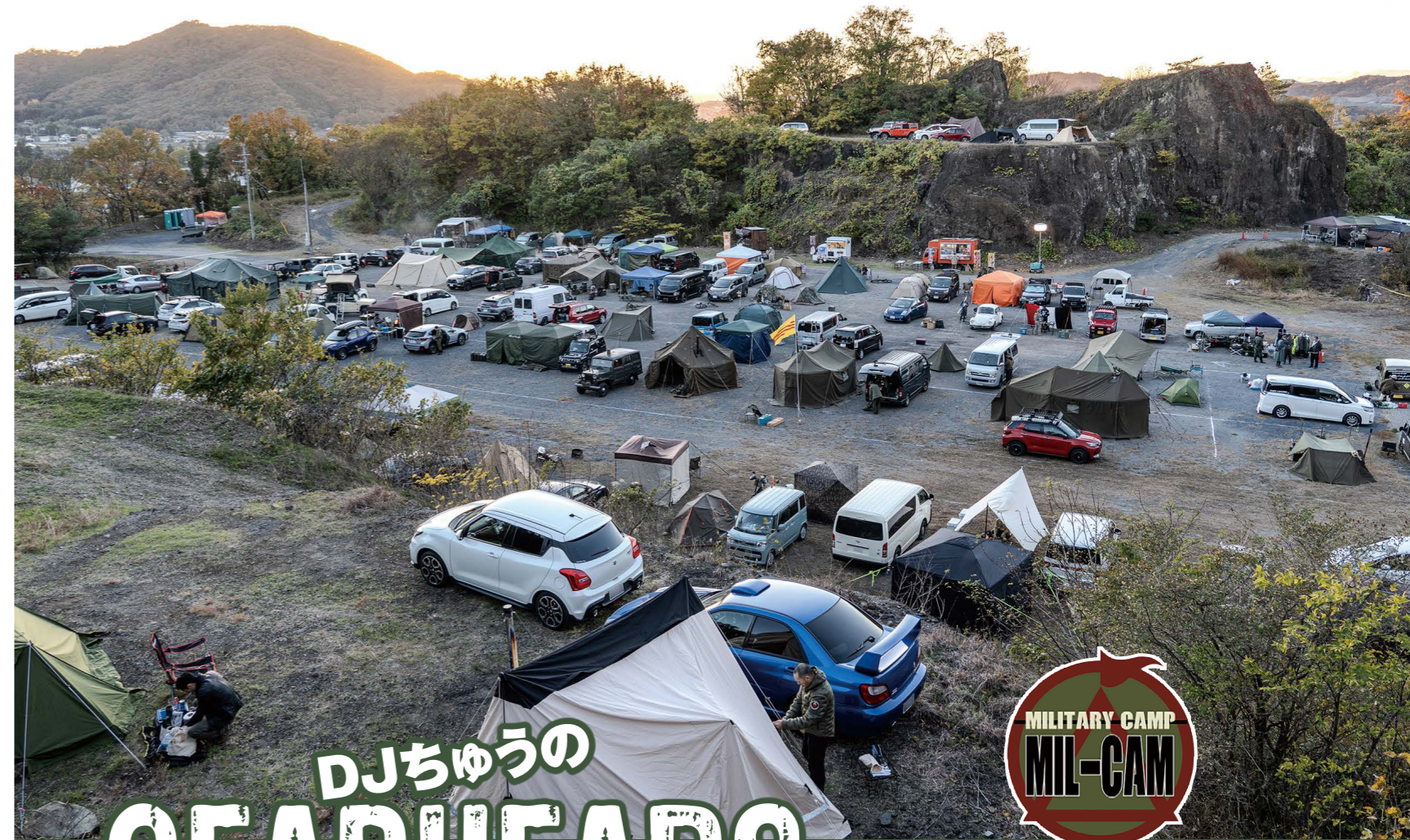
1990年代のアメリカ。「AR-15系ライフルの銃身やストックを極限まで短縮しマシンピストル化する」というカスタマイズが同時多発的に流行した。中でも1992年にロッキーマウンテンアームズ社が開発した「パトリオット・ピストル(=愛国者の拳銃)」が、そのネーミング・センスも手伝ってか話題となり、以降、「極端にダウンサイジングされたAR」はどれも「パトリオット」と呼ばれるようになった。

極端な短銃身は弾頭に十分な加速や回転を与えられずライフルやカービンよりも威力・射程・命中精度は低下。発砲音や発射炎も凄まじい。さらに'90年代半ばからアメリカでも銃規制が強化され民間市場が大幅に縮小……と悪条件が重なり、いずれ消えてしまうか?と思われたパトリオットだが、現在も少なくないメーカーが製造を継続。ごく少数だが法執行機関にも納入されているようだ。

グロックやM&P等にそのまま転用できそうな新型スクエア・ハイダー。取り付けは14mm逆ネジとなっている。

マグハウジング部のプリントやセレクター・ポジションを示すピクトグラムはハイサイクル・カスタムとは違うNEWデザイン。





# DJちゅうの GEARHEADS #ミリキャン #MILCAM JUNCTION

**GEARHEADS** [ギアヘッズ]  
熱狂的な装備フリーク—  
**JUNCTION** [ジャンクション]  
接合、連接、交差点または分岐点—

**5.5th MIL-CAM**  
**2023.11.25-27**  
**Military Camp Event**  
**#MILCAM** 写真・文/DJちゅう

ミリタリーとキャンプを融合したのんびり大型アウトドアイベント「ミリキャン」。昨年11月に開催されたミ

リキャン5.5th。例年開催地として使用していた本栖ハイランドがあいにくの整備工事のため、今回は特撮

の聖地としても知られる栃木県岩舟山に場所を移し、第5.5回目として特別開催となった。今回はそのミリキャン

参加者たちのこだわりのミリタリー×キャンプギアに注目してミリキャン5.5thの様子をお届けしよう。





# 05JX

## 令和5年度 自衛隊統合演習【前編】

年に1度、陸海空自衛隊が一丸となり実施する演習がある。それがJX (Joint exercise)だ。防衛および警備に係る自衛隊の統合運用について演練し、自衛隊の統合運用能力の維持・向上を図ることを目的としている。訓練の一部には米軍も参加し、日米相互運用能力の向上も目指した。主として南西諸島部で繰り広げられた巨大演習を追う!



黒川海岸に配置された第42即応機動連隊の16式機動戦闘車。05JXではこのように島内各所に各部隊が展開した。実際の地形を利用することで、より実践的な訓練を行なうことができる。